

◇おたふくかぜワクチンについて

(1) 病気の説明

おたふくかぜはムンプスウイルスの飛沫感染後、増殖したウイルスが全身に広がり、各臓器に病変を起こします。潜伏期は2～3週間です。周りの人に感染させる可能性のある期間は、発病数日前から耳下腺、顎下腺または舌下腺の腫脹が始まった後5日を経過するまでと考えられています。主要症状は耳下腺の腫脹で、境界不鮮明で均一なやわらかい痛みを伴った腫脹を示します。顎下腺、舌下腺が腫脹することもあり、発熱を伴うこともあります。思春期以降に罹患すると、症状が著明で、合併症の頻度が高くなります。合併症で最も多いのは無菌性髄膜炎で、診断される頻度は1～10%です。頻度は少ないですが、他に脳炎、膵炎などがあります。男性では精巣炎、女性では卵巣炎を合併することもあります。特に難聴合併への注意が必要です。

(2) ワクチンの概要

ムンプスウイルスを弱毒化した生ワクチンです。ワクチン接種後の抗体陽転率は90%以上と高く、国内での流行時調査では、ワクチンの効果は80%程度と考えられています。ワクチンを受けていたにもかかわらず発症した人のほとんどは、軽くすんでいます。（予防接種部会・おたふくワクチン作業チーム報告書）

現在市販されているおたふくかぜワクチンの副反応として、耳下腺の軽度腫脹が1%位にみられます。無菌性髄膜炎の副反応報告頻度は、接種1,600～2,300人に1例程度です（ワクチン添付書類から）。自然感染での無菌性髄膜炎の合併が1～10%あることや難聴のおそれのあること、罹患すると保育所や学校を長期間休まなければならないこと、発病は3～6歳が多いことを考慮すると、接種はMRワクチン第1期、水痘ワクチン1回目、Hibワクチン追加、小児用肺炎球菌ワクチン追加等を終了したらできるだけ早期に、少なくとも好発年齢である3歳より前に接種することが勧められます。また、日本小児科学会は予防効果を確実にするため、MRワクチン第2期と同時期に2回目の接種を推奨しています。